



▲道路に崩れ落ちた塀が、地震の激しさを物語る (写真提供：早苗勇一さん)

特集

# 備えはあるか—。

私たちが突然襲う自然災害。その発生を事前に予測することは難しいものです。自然災害から自分自身や家族を守るために必要な備えとは何か。熊本地震で被災した早苗勇一さんの体験談や被災地で支援活動を行った人へのインタビューを通して、災害時に私たちが直面する状況を知り、災害に備えて日ごろから何をすべきかを考えます。

問い合わせ 地域づくり課へ

# 突然起こった地震。 冷静さを保つことで必死だった。

## 最初の地震 不安と恐怖が続く

大学のサークルの会議に出席していたとき、最初の地震が起きました。窓や棚がガタガタと揺れ、恐怖で動けない人や自分の貴重品を探す人など、会議室の中はパニック状態。建物の中には危険だと思ひ、仲間を掛け、校舎の外に逃げました。その後、熊本市内から通う友人と一緒に自宅に戻りましたが、

余震が続いていたので、恐怖と不安で夜も眠れませんでした。実際に寝たのは1〜2時間だったと思います。

## 安心した後には起きた本震

次の日、周りの状況を確認しながら食糧や水を調達しました。夕方ごろには余震も落ち着き、安心して寝ようと思ったとき、本震が起きました。部屋の壁は崩れ、テーブルや棚が私に向かって飛ん

できました。家具が頭に当たり、私は気を失ってしまいました。

「誰かいますか。」

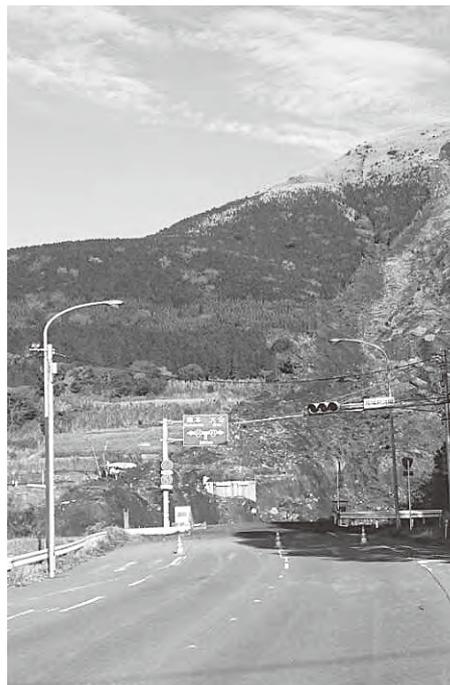
建物の外から聞こえてきた呼び掛けで、私は意識を取り戻し、部屋の外に飛び出しました。そのときも揺れは続いていたと思います。

私は何よりも人の命が大切だと思い、先輩と一緒に崩れたアパートに取り残された人を助け出し、残された人がいないか確認しました。このとき、リーダーシップをとる先輩の存在が、私たちの心の支えになったことを覚えています。

## 村は孤立 頼りは自分自身

阿蘇大橋が崩落し、私たちが暮らす村は孤立。支援もすぐに受けられない状況でした。また、道路には崩れた建物や石垣のがれきが広がり、車が往来できない場所も多くありました。

避難所に移動しても、相次



▲信号の先にあった阿蘇大橋は崩落  
(写真提供：早苗勇一さん)

ぐ余震で施設内はパニック状態でした。自衛隊の到着も、かなり時間がたってからだったと思います。

物資も不足していました。自宅に取りに帰ろうと思っても、建物が崩れていて部屋には入れないし、余震が続いて、自宅には戻れない状況でした。自分で持って出られる量だけでもカバンに用意し、身近に置いていけばよかったと思いました。

情報の収集には、テレビや携帯電話よりラジオがとても役に立ちました。また、各地から集まるテレビ局などの報道関係者に尋ねることも有効でした。

私は、これらの手段で通行できる道路の情報を集め、岡垣町まで避難する経路を確認

することができました。

## 被災して分かった 災害時の心得

災害が起こったとき、いかに自分が冷静でいられるかが大切だと体感しました。被災直後は自分のことで精一杯でしたが、少し落ち着くことで、避難することも周りの人を気遣うこともできるようになりました。

また、公共の支援が届くには時間がかかります。それまでの間、自分たちで助け合うことが大切だと思います。そして、不安や危険を感じたときは、迷わず避難すること。何かが起きてからでは遅いので、まずは行動することが大切だと感じました。



早苗勇一さん

東海大学農学部在籍。大学のある南阿蘇村で熊本地震に遭う。現在は岡垣町の実家に一時避難している。

# まずは身近なところから さまざまな状況を想定して

自分や家族の命を守るために、私たちはどのようなことを心掛け、行動すべきか。熊本で被災地の支援活動に携わった防災士の橋内政則さんに聞きました。

## 自分の身を守るために何をすべきか想定を

災害時には、まず自分の身は自分で守ることが大切です。誰かが救ってくれるという意識では、いざというときに行動できないことが考えられます。災害が起きたとき、まず何をするかを決めておいてください。また、住んでいる地域の特

徴をよく確認し、災害の種類ごとにどの経路で避難するかなどを想定し、その内容を家族と共有しておくの良いでしょう。

## 早めの決断、早めの行動が命を守る

地震に限らず、長時間降り続く雨や台風の接近で、身の危険を感じたときや一人で家にいることが

不安なときは「空振りでもいい」という気持ちで、早めに避難することも大切です。また「まだ大丈夫」という大丈夫」など過信は禁物です。油断せずにさまざまな情報を収集するようにしましょう。

## 地域の防災訓練も繰り返し行うことが重要

大規模災害時は、公共の手助けが届かないことが考えられます。実際に、私が訪れた地域では、公民館や農家の納屋を避難所として地域の人たちが運営していたところもありました。自治区や組単位で日ごろから防災訓練や避難所開設の訓練などを繰り返し行い、地域で協力する体制を整えておくことも重要です。



防災士 橋内政則さん

## 被災地で実感した 災害時の備え

5月3日～6日にかけて、被災地支援のため、岡垣町から2人の職員を派遣しました。被災地や避難所で活動した2人に、災害時に大切なことを聞きました。

### 普段から地域の人とのつながりを大切に



主任 門司健太郎

災害が起きた後のことを考えておくことも大切だと感じました。避難所ではさまざまな人が共同で生活します。このため、避難生活が長く続くと、小さなことでも衝突が生まれることがあります。しかし、人と人とのつながりを持っておくことで、お互い助け合うことができます。食糧

や水は短期間で調達できても、人間関係はそうはいきません。普段から隣近所の人や自治区など地域の人とコミュニケーションをとり、良い関係を築いておくことも、備えの1つだと思います。

### 自分に合わせた持ち出し品の用意を

避難所には、食糧や水など生活に必要な物資はそろいます。しかし、持病を患う人やアレルギーのある人など、避難している一人ひとりの事情に合わせた物資が用意されるまでにはとても時間がかかります。自分の身体のことを一番理解しているのは、自分自身です。災害時に困らないように、非常持ち出し品を用意するときには、自分が生活するためにはなくてはならないものをよく考えて準備しておくことが大切だと思います。



主事 立林健太

# あらゆる災害時に情報を発信する 新たな仕組みを取り入れます

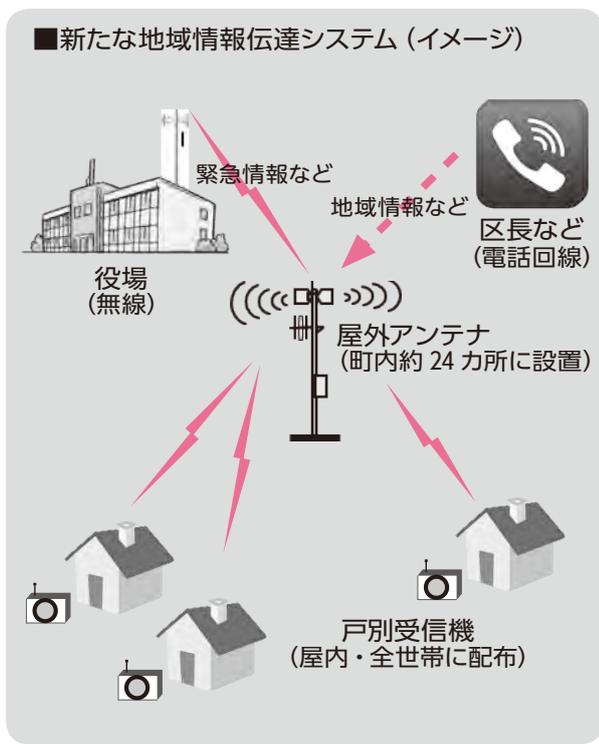
町では、あらゆる災害時に緊急情報などを確実に伝えるために、平成28年度から全世帯に受信機を配布する準備を進めます。ここではその仕組みなどを紹介します。

## 各家庭に受信機を設置

各世帯に配布する受信機は、ラジオのような形をした装置で、国や町が放送する災害や武力攻撃などの緊急情報を無

線を受信し、装置に内蔵されているスピーカーから発信します。

これまで緊急情報は、野外スピーカーから発信されていたため、地形など周囲の環境で聞き取りにくかった場所も



## 有線放送に代わる 地域情報の発信手段に

ありました。しかし、各世帯ごとに受信機が配布されるため、確実に情報を聴き取れるようになります。

この装置は、自衛隊基地に関する事故災害をはじめとしたあらゆる災害時に、緊急情報を確実に伝える手段として導入されますが、通常時には、現在の有線放送に代わる手段として、各校区や自治区の地域情報を伝えるために利用できます。このため、現在有線放送がない地域の皆さんにも、地域情報の伝達手段が整備されることとなります。

## 平成31年度の本格運用を目指します

平成28年度から、無線を送受信するためのアンテナを町内各地に設置していきます。各世帯への受信機の配布は平成29年度から開始し、平成31年度には町内の全世帯に配布する予定です。

## 町民の安全と安心を守るために

まず、熊本地震災害で亡くなられた皆さまにお悔やみを申し上げるとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

岡垣町では、町に住む皆さんが安全に安心して暮らせるように、近隣市町に先駆けて、戸別受信機を導入することにしました。このほか、非常食の備蓄など、災害への備えを行っています。しかし、大規模災害時には想定外のことが発生するおそれがあります。皆さんも家庭や地域で災害への備えを十分確認しておいてください。



岡垣町長 宮内 實生

## 防災マップを持っていますか

岡垣町防災マップは、地震や津波、洪水、土砂災害への備えとして、自分や家族の命を守るために役立つ情報を掲載しています。梅雨時期を迎える前に、再度内容を確認しておきましょう。

●岡垣町防災マップが手元にない人は地域づくり課へ。また、町公式ホームページからもダウンロードできます。

(URL : <http://www.town.okagaki.lg.jp/s019/010/011/020/030/201502050092.html>)

